

この時期の学校は、どこでも研究授業がさかんに行われる。研究授業というのは、教師の力量を高めるために、授業を見合せて批評し合う。

「これさえなけりやあねえ。」
気楽な商売なんだけど、とでも言いたげにつぶやく人もある。

このところ立て続けに、その研究授業で『かさこじぞう』を見る機会があった。題名を見ただけで、「かさこはいらんか」「じよいやき」と音が響いてくる。貧乏くさい話、と政治向きのトンチンカンな横やりが入って一時排撃されかけたが、しぶとく教科書に載り続けて、おそらく日本中の子どもたちに読み継がれている。

改めて読んでみて、やっぱりおもしろい話だと思っただけ、それは一部をすっかり忘れていたからだ。正月の餅さえ用意できないじいさまは、笠を作って売ることを思いつく。結局、一つも売れず、吹雪中に立つ六地藏にそれをかぶせて帰る。用意した笠は五つ。足りないのは、頬被りに使っていたつぎはぎだらけの手ぬぐいさえ与えて。

餅がないまま暮れを迎えた二人は、餅をつくまねをして過ごす。そういえばそうだった。以前読んだときはさして何も思わなかったために、こんなやりとりが

あったことを忘れてしまっていたのだ。

餅をつくまねに興じるじいさまはあさまは、いかにも楽しげである。つまり、餅がなくても二人は満ち足りているのだ。冒頭部分で貧乏が強調されているのに引きずられてしまい、二人がちつとも不幸でないことを見落としていた。笠が売れず、しかもそれを持ち帰らなかつたじいさまを責めることなく、まったく機嫌の変わらないあさまの不動心は、じいさまのそれと対をなし、ご本尊の協侍のごとく揺るがない。

さて、ならばなぜ地藏様たちは、恩返しに金品をどっさり贈ったのだろうか。なくても満ち足りている者に俗世間の宝物など不要である。この道具立てを現代小説に移植したなら、トラブルに巻き込まれるか、墮落していく過程で失ったものの大きさにのおののか、二人の幸せを破壊せずにはおかないだろう。

「じいさまは、とつてもやさしい人だと思いました。」

楽しそうに発言する子どもたちを見て思った。地藏様の贈り物は、きつと読者プレゼントなのだ。無欲でやさしい二人がいい目にあわなかつたらただじゃおかないから、そんなふうにして物語の中に入り込む子どもたちに、待つてましたのカタルシス。やっぱりこのお話、ずっと教科書に残してもらいたい。



専業ババ奮闘記 (その2) 27

木幡智恵美

虫博士 (2)

「アオムシが蛹になったよ」と言つて寛大が玄関を入ってきたのは日曜日の朝のことだった。左手には虫かご、右手には虫捕り網を持っている。一瞬長男かと思つた。三十年近く前、同じ恰好をしていた長男と、どことなく雰囲気似ているのだ。

あとひと月足らずで産前休暇に入る娘は、そのお腹と同じくらい膨れたリュックを「どっこいしょ」と降ろし、そのまま座り込んだ。「虫捕りに行きたい」と寛大は急かすが、実歩は、「お絵描きがいい」と言うので、娘は実歩の相手、私が寛大に付いて行くことにした。

歩いて十分もかからないところに市営住宅があり、その敷地内にちよつとした公園がある。草地があり、まわりには木が植わつていて、団栗や椎の実が落ちていた。寛大は虫探し、実歩は木の実拾いと、どちらもが楽しめる場所で、散歩コースの一つだ。

寛大は草地へと走り、虫を探し始めた。「あつ、蝶だ」寛大が追う目の先を見ると、ヤマトシジミがいる。「ばば、捕つて」と言うので、渡された網を振つた。網の中のヤマトシジミを寛大はそつと羽をつかんで取り、虫かごに入れた。その後、キアゲハを捕まえてかごに入れ、帰りにはアカタテハを網で捉えたものの、羽をつかみ損ねて逃がしてしまった。それでも、二匹捕まえた寛大は満足して家に帰つた。

「お母さん、蝶を捕まえたよ」と、娘に見せると、「すごいね。二匹も捕つたの。じゃあ、逃がしてあげようね」と言われ、すんなり窓から放してやる寛大。長男はそうはいかなかつた。部屋の中に放して、また捕つていじりまわしていた。本人はじっくり観察していたのだろうが、いじっているうちに脚がもげたり、首が取れたり、羽の鱗粉が失せてしまつたり。あまりに殺生を繰り返すので、しまいには虫の模型を与えて持たせるほどだった。その点、寛大は捕らえた虫に執着することはなく、捕まえることで満足しているようだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。トランプの中国敵視政策はどこまで続くんだ。

年金生活者 彼は安全保障の課題を、自分の得意なデール（取引）の課題に転化することで戦争のリスクを低減させた。それは国家間の関係をすべてデールにしてしまうことでもある。それが米中対立を引き起こした。

国家間の関係がデールになるということは、国家が市場のプレイヤーのひとつになることを意味する。それは市場を外からコントロールする国家の機能が低下することでもある。資本のグローバル化がそれを不可避な流れにした。

かつて市場の大部分は国家の中に存在した。今は逆に市場の中に国家が存在する。資本主義の高度化、グローバル化とともに、国家に対する市場の優位が広がった結果だ。

30代 金融危機やコロナ危機に襲われると、市場はたちまち国家の財政出動に頼らざるを得ないから、必ずしも国

持ちを強めていたのに、知的エリートが主導する民主党はそれに無頓着だった。

30代 天安門事件の学生リーダーだったウアルカイシというウイグル族の民主活動家が、中国の人権侵害に対するアメリカの圧力強化について「米国は明らかに、中国の反対で避けてきた行動の基準を変えた。人権問題で中国を包囲することは、自国に有利だと気付いたためだ」と朝日新聞で語っている（10月17日朝刊）。

年金 人権問題に関心の薄かったトランプは得意なデールの一環として中国に貿易戦争を仕掛けた結果、その戦術として人権外交を強める結果になった。

彼は国内では白人至上主義者への批判を控えるなど、黒人差別に反対する運動に冷淡な態度をとり続けてきた。分断されたアメリカ国民の一方の側、とりわけ衰退産業の白人労働者の側に立つことによって大統領選を勝ち抜き、その後も高くはないものの底堅い支持率を維持してきたトランプにとつて、人権問題は触れたくない内政の課

家に対して優位とは言えないんじゃないか。

年金 国家のカネはもともとは市場から集めた税金だ。市場は危機に備えて国家と保険契約を結び、その保険料として税を支払っているとみなすこともできる。

トランプはそうした世界的な変化を敏感に察知した国家のリーダーのひとりと言っている。米中対立がどこへ向かうか予測するのは困難だが、少なくとも言えることは、トランプが対中関係をデールと考えている限り、両国が熱い戦争、リアルな戦争に行き着くことはないということだ。

30代 米中の対立を覇権争いと見る見方がある。

年金 その側面は否定できないとしても、主要な争いの場はかつてのような陸や海や空ではなく、市場に移ったところにある。抑止力を競い合う冷たい戦争、バーチャルな戦争と平行して、市場を舞台にした、熱くはないがリアルな戦争が続くだろう。

題のひとつに違いない。

それに対し、中国の人権問題は逆にデールに有利になる。トランプ政権はこれまで、ウイグル族への人権侵害を理由に中国政府の幹部らに制裁を科したり、国家安全維持法が施行された香港への優遇措置を廃止したりしている。その動機がなんであれ、人権抑圧に苦しむウイグル族や香港市民にとっては歓迎すべき措置となった。

30代 トランプは国内でも対立を引き起こしている。

年金 彼は対立の仲裁者ではなく、当事者になることによって、上から目線になる愚を免れ、支持を広げたとと言える。

仲裁者、すなわちアメリカ社会の分断を統合する役割を任じようとするれば、分断された双方の上に立たざるを得ない。上から目線になることは避けられない。それは現在の有権者がもつとも嫌うことの一つだ。

それを察知していたと思われるトランプは4年前の大統領選でワシントンのエスタブリッシュメントを上から目線の権化のように攻撃する一方、衰退した製造業の白人労働者をワシントンから「忘れられた人たち」と呼んでその味方を自任し、民主党の地盤を掘り崩した。

消費の過剰化によって国家から分散した権力を手にした諸個人はそれに相應する処遇を求めるようになり、上から目線の政治家や政党、政府を嫌う気

これは米国の非戦指向への転換と並んで、トランプの「デール外交」が導き出した「成果」として評価することができるとができる

30代 そのわりに大統領選でバイデンにリードを許している。

年金 トランプは常識破りの政治手法であげた功績が米国民の多くから評価された。今後はその常識破りの副作用が功績を上回る恐れがある、と有権者からみなされ始めているように見える。

金正恩との握手は北朝鮮による核保有の事実上の容認という副作用を、中国との制裁合戦は自国経済へのダメージという副作用を、雇用の拡大は格差の拡大という副作用を生んだ。もしトランプが落選すれば、ヘーゲルの言う「理性の狡知」ならぬ「歴史の狡知」が彼を世界史の表舞台に押し上げ、その役目を果たさせたあと、退場させた総括できるかもしれない。あるいは別の言い方をすれば、歴史は常に行き過ぎとその揺り戻しを原動力にジグザグにしか進まないと言いうこともできる。

ニュース日記 759
中村 礼治

「歴史の狡知」が生んだ大統領